

第 1 回ラオス若手視覚障害者リーダーの会 The 1st Young Blind Forum

ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業 第 8 期生
インペンさんのダスキン報告会

Her experience in Japan and idea sharing among young visually impaired
(Finalized)

Date : 21st July (Saturday) 2007

Place: (JICAFE)

Time: 13:30-17:00

Organized by IT workshop and ADDP

**Participants: Young Visually Impaired (NRC, Thongpong School, Laos
Blind Association, IT workshop, etc. 35 people)**

Purpose

1. To establish good networks among young visually impaired by sharing their ideas, also to discuss among participants how to improve their live and educational system of visually impaired in Laos
2. To motivate young visually impaired to express and share their opinions, also to build leadership skills by this gathering.

Program

13:00-

Registration

13:30-13:40 Opening Speech by Madam Yashiro, President of ADDP

13:40-13:50

MC: "Introduction of the purpose for today's workshop"

1. Why we plan this forum?
2. Education for visually impaired. "Information" is our right!!
3. Explain today's schedule

13 : 50— 14 : 10

Presentation by Madam Kongkeo (Laos Blind Association)

“ Current positive movement and organizational activity of visually impaired in Laos”

14 : 10—14 : 30

Presentation by Ms Inpeng

“Experiences in Japan and introduction of Japanese educational and social welfare system and job opportunity, lives in general of visually impaired in Japan”

14:30-14:50

Presentation by Mr. SengSuliyon (20 min)

e.g. My efforts and volunteer works as blind teacher at NRC school for the blind

Future expectation, etc.

14 : 50—15 : 10

Presentation by Mr. Audai (Teacher of Thongpong School for the blind)

e.g. “Current Activity and challenge of production of Braille textbooks as blind teacher”

15 : 10—15 : 25 Coffee Break

15:25-15:45

Presentation by IT workshop

Current activity of IT workshop and future goal (20 min)

15 : 45—16 : 30 Discussion among participants

Topic: Future Expectation, Problems sharing regarding their current situation of educational environment

16 : 30—16 : 45 Feed-Back from Ms. Inpeng

16 : 45—17 : 00 Closing remark by Mr. Shintaro Nakamura, JICA

第1回ラオス若手視覚障害者リーダーの会
Young Blind Forum
報告書

2007年7月27日
アジアの障害者活動を支援する会

主催：ADDP、ITワークショップ

開催日時：平成19年7月21日土曜日

開催時間：午後1時～午後5時半

開催場所：JICA F E（ラオスJICA事務所が運営するNGO活動の情報センター）

参加者：ラオス視覚障害者協会コンケオ会長、インペン・ビライフォン、NRC盲学校生徒、トンボン視覚障害者センター（盲学校）、両盲学校教師、ITワークショップ・メンバー、タイIT講師 Mr. Bee Songkran(元ダスキ研修生) 総勢40名

概要：ラオスJICA事務所が運営するNGO活動の情報センター会議室において、ラオスで初めての若年層の視覚障害生徒を対象にした「第1回ラオス若手視覚障害者リーダーの会」を実施した。参加者はラオス盲人協会コンケオ会長はじめ、ラオス・ビエンチャンに2校ある盲学校から10代、20代の若い生徒30人が集まった。本フォーラムのコーディネーターは第8期ダスキ・アジア太平洋障害者リーダー育成プログラムに参加し、ラオスに帰国したばかりのインペン・ビライフォン女史で、帰国後すぐに本フォーラムの企画に携わり、協力団体であるITワークショップのメンバーと内容の詳細を議論し、インペン女史のかねてからの希望でもあった「若手視覚障害者へのエンパワメントと啓発」を目的とした当事者意見交換の場としてこの度計画された。本フォーラムは当事者の手で運営・実施された点においてビエンチャンでは初めての試みであった。また本フォーラムをもってインペン女史の日本における研修成果の発表会とした。

ラオスにおいて盲人協会は組織されたばかりの比較的若い団体であり、今だラオス労働社会福祉省からの正式認可を受けていない。そのため国内の団体としての活動に制限が課せられる（下記ラオス盲人協会注参照）。組織としての結束や視覚障害当事者にむけての情報提供やサービスなどはまだしっかりと構築されておらず、独立した視覚障害者当事者団体としての強いリーダーシップも残念ながらみられない。また視覚障害の若年層はほとんどが盲学校に通っており、特に市内から遠く離れたところに位置するトンボン（ライトハウス）センター盲学校においては寮生活で社会と完全に隔離された生活を送っている盲学校生徒が多く、自己啓発や当事者運動という概念も分からない状態である。インペン女史の日本におけるダスキ研修成果発表会として今回本フォーラムを開催することで、イン

ペン女史から前向きで希望に溢れたメッセージと仲間であるラオス視覚障害者への激励及び彼女の日本における研修で学んだ知識やスキルをラオスの視覚障害の仲間達と分かち合うことで、ラオスの若い視覚障害者にも将来に対する希望やチャレンジ精神が醸成され、仲間との団結、連携の重要性が認識されるだけでなく、未来を担う視覚障害者リーダーの発掘やリーダー育成という意味においても意義深い。本フォーラムは半日の開催といえビエンチャン市内の若い視覚障害者これだけの人数が一同に集い、自分の言葉で語り、考え意見を共有したことは大きな第一歩といえる。今後将来的に当事者間のネットワーク構築は不可欠であり、その点からも本フォーラムの基本的目標は達成し、貴重な当事者間の連携を促進する機会であった。

本フォーラムの参加者はトンボン盲学校から 9 名、NRC 盲学校から 12 名、盲学校教師各 2 名、ラオス盲人協会から 5 名、IT ワークショップ 8 名、ADDP2 名、ラオス JICA 事務所 1 名、インペン・ビライフォン女史、ビー・ソクラン氏（タイ）。視覚障害当事者の若者は全て現役の統合公立校に通う学生。プレゼンテーションを行ったのも全てリーダー格の視覚障害当事者であり、初めての経験の当事者もいたが、聴衆は若い視覚障害者とあって、彼ら自身の言葉による現状の問題点の認識、あるいは今後の期待などを語ることにより、ピアな立場での問題意識の共有ができたことは大きな前進である。本フォーラムの運営は全て若い障害当事者が行った。今回のフォーラムのテーマは「視覚障害者の教育環境の改善」であり、盲学校教師も含め、彼らを取り巻く教育環境についてその問題点を闊達に議論した。統合教育がとられているラオスにおいては、教育省の視覚障害児への理解や認識が低く、まだまだ視覚障害生徒に対する教育のバリアフリー環境が整っていないことが改めて認識された。点字教材の不備や学校教師の視覚障害児に対する理解不足、入学拒否や大学関係者の無理解、親の視覚障害児へ対する教育の重要性の認識不足など、問題点は数多く、特に NRC 盲学校教師が切に訴えていたのは、ラオス教育省の視覚障害児に対するバリアフリー教育施策の推進や学校側の理解啓発などが不可欠であり、教育は視覚障害児の未来を左右する重要な問題であることから迅速な政府の対応、大学の対応の改善などを熱心に本フォーラムで発言していた。インペン女史もラオスにおける視覚障害児教育分野でその改善を今後の自身の活動の基盤としたいと考えており、インペン女史、盲学校教師、若手視覚障害者リーダー、IT ワークショップなどが連携を密にし、教育省や社会に対して啓発運動などの活動を行うためのよい当事者間のネットワークが本フォーラムを通して構築された点は評価できる。また、タイから参加した元ダスキン研修生のビー・ソクラン氏も本年 1 月からラオス視覚障害者の ICT 訓練の専任講師として積極的にラオス事業に関わっており、ラオス視覚障害当事者からは絶大な信頼を得ている。インペン女史とソクラン氏は共にダスキンアジア太平洋障害者リーダー育成プログラムを修了した元研修生であり、プログラム後に自国にそれぞれ戻り、日本での研修成果を自国障害者のために自身の活動の中に十分にリーダーシップを発揮し、共にダスキンで学んだノウハウ活かすためにも、障害者エンパワーという大きな目的のもと、隣国同士と一緒に連携し、協力し合う

両ダスキ元研修生の姿は、今後ダスキプログラムの研修生活動の模範的プロジェクトとして評価できるのではないか。今回、ソクラン氏はラオス視覚障害者第2回 ICT トレーニングの講師として（詳細別紙参照）ラオスに滞在中であり、本フォーラム参加を通して、ソクラン氏のタイにおける今までの自身の活動や視覚障害者の教育全般のタイにおける現状を参加者にわかりやすく説明してくれた。隣国ラオスにとってタイはよいロールモデル国であり、今後もラオス側にとってタイ国からその活動の歴史や活動進捗を直接学べる点においてもソクラン氏の存在は大きな励みとなったようだ。今後もソクラン氏を巻き込んでのラオスにおける視覚障害者のエンパワー事業が相乗効果的な希望の連鎖を生み、良い形になって育っていきそうな息吹を感じさせるフォーラムであったと考える。特に最後のセッションであったディスカッションでは、3つのグループに分かれて、1. 現在視覚障害生徒が教育現場で直面する様々な問題 2. 高校を卒業し大学に進学したい希望はあるが、それを阻む問題点。3. 視覚障害当事者として現状を改善するためにどのような活動が必要か—の以上3点について意見交換をした。教育のバリアフリー、教育の機会平等に多くの視覚障害者が関心を持ち、またこのような若手視覚障害者が集まる場が今後も引き続き必要であるとの声が多く上がり、近い将来定期的にラオス視覚障害者及びITワークショップのイニシアティブで再度開催したいとの要望が出た。

注：ラオス盲人協会

ラオスにおいて盲学校の創立は今から15年前であり、当時国立リハビリテーションセンターの中に一室の盲学校クラスが創設された。当時の盲学校教師は現ラオス盲人協会のコンケオ会長（全盲）でそれより以前の1989年にタイへマッサージや点字教材作成技術訓練などを受講したラオスの3人の視覚障害者リーダーがタイから帰国後にラオスにて本格的に視覚障害者活動（マッサージ治療院開業）を開始し、2001年から同国初の障害当事者組織として活動を始めた。因みに上記3人の視覚障害者の一人、カマン氏はLDPA（ラオス障害者協会）の初代会長であり、自身もマッサージ治療院をNRC近くに開院した（1999年没）。ラオス盲人協会は2007年7月現在いまだ公式に政府から登録されていないものの、2007年中には正式に政府登録される見込みである（団体としての活動が登録後初めてラオス政府から許可される）。現在役員8人全てが視覚障害当事者。オフィスには晴眼者3人がコンケオ会長の下で勤務している。ノルウェーやベトナムからの視覚障害者協会からの支援が収入の大きな部分を占めており、団体登録がされた場合は幅広く、支援を得て、ラオスの視覚障害者のために様々なサービスを行いたいと考えている。事務所の横にはマッサージクリニックが併設されており、現在は2人の視覚障害者マッサージ指導者の下15人の視覚障害実修生がマッサージを行っている。一日20～40人の来客がある。料金は約3米ドルで1～2時間のマッサージが受けられ、視覚障害者にとっては大切な職業であり、生活の資金源となっている。

IT ワークショップによる 2 週間の視覚障害者集中 ICT トレーニング

開催期間：2007 年 7 月 16 日～2007 年 7 月 27 日（15 日間）

講師：ビー・ソクラン講師（タイ）

参加者：IT ワークショップに通う視覚障害者 IT 講習生徒（盲学校教師含む）8 名

於：IT ワークショップ

支援団体：ADDP

IT ワークショップとは？

ラオスにおける IT を専門とした 20 代が中心の 4 名のポリオ青年を中心に組織されている IT ワークショップは現在、健常者、障害者を対象にコンピューター技術を教えている作業所であり、健常者からは授業料を、また障害者には無償でコンピューターを教えている。中心メンバーは 3 名であり、チーフにポーリー・ピアリー（32 歳、元 JICA 沖縄研修員）、サブ・チーフにシンサイ・ロー（27 歳元 JICA 東京：職業リハビリテーションと障害者の就労コース 2006 年参加研修員）、シーワン・ロー（会計、IT 講師）であり、経済的に自立して彼らが主体的に活動している自主運営の小規模作業所である。収入も少しだが着実にあげている。昨年 7 月より、クロス・ディサビリティの協力の下、コンピューターの初心者である 2 名の視覚障害生徒を受け入れ、コンピューターに音声ソフトを搭載、6 ヶ月の間にワードやエクセル、インターネットのアクセスまでをマスターさせた。視覚障害者にとっての IT は大きな将来への希望のモチベーションとなり、インターネットを通じた情報バリアフリーの獲得は何よりも視覚障害者の自立精神を高め、エンパワーのツールとしては大変効果的である。前述 2 名（ジョット氏、ケオ氏）の視覚障害生徒の PC 上達度は極めて早く、両名とも自信と希望に満ち溢れ、現在リーダーとしての素質を開花させている。2007 年 1 月に視覚障害者 ICT セミナー及び 2 日間 IT 講習をビエンチャンにて実施。講師は日本から 2 名の視覚障害当事者の専門家（日本点字図書館田中氏と国際視覚障害者援護協会の山口氏）とタイより IT インストラクターで元ダスキン研修生のビー・ソクラン氏を招聘、50 名の視覚障害参加者に対して教育の啓発と視覚障害者 IT 技術の紹介および ICT 基礎講座を行った。本セミナーは大きな反響をもって終了し、セミナー後、IT ワークショップは更なる 4 名の生徒を受け入れを行い、引き続き第 2 学期（半年間）の IT 講習を始めた。現在 4 名の新規視覚障害者生徒と 2 名の上級クラス視覚障害生徒の計 6 名が IT ワークショップで学んでいる。上記 6 名の所属は 4 名が NRC 盲学校、2 名がトンボン盲学校である。次世代のリーダー候補としても有望なメンバーである。

IT ワークショップによる視覚障害者 ICT 集中トレーニング

概要：2007年7月16日より、1月に招聘したタイのIT講師のソクラン氏を再びラオスに招聘、1月の講座のフォローアッププログラムとして、週間の集中ICTトレーニングを開催した。参加者は厳選された若い視覚障害者IT講師候補やリーダー候補であり、ソクラン氏は通常のICTトレーニングだけでなく、リーダーシップ・トレーニングも取り入れた独自の新しいエンパワメント方式でカリキュラムを構成、朝8時半から夕方5時までフルに研修員と集中講座を行い、(プログラム骨子は別紙参照)27日をもって終了した。1週間を終えた21日時点で、成果は上々であり、参加者は上記6名に加えインペン女史他2名の追加の盲学校IT講師も講習会に参加したいと申し出ており、最終的には12名がトレーニングを受けた。現在ビエンチャンで視覚障害者にITを教えている施設は2箇所であり、ひとつはこのITワークショップ、もう一つはNRC内の盲学校である。盲学校ではセンスリヤン氏(インペン女史と4年前に4ヶ月のPC講習にタイに出かけて基礎学習をした経験あり)が講師であり、まだまだ技術的にも未熟なことから、ITワークショップでの講習を望み、彼も参加した。NRCにおいても視覚障害者にITを教えられる講師の数は大変少なく、数は絶対数不足していることから、今後未来のIT講師のためのトレーニングとしての役割も本ITワークショップが担っていることから、再び今期にもう一度タイ・ソクラン氏による2週間程度の集中トレーニングが必要との要望もある。生徒のソクラン氏に対する信頼は絶大で、タイ語とラオス語では言葉の問題も全くなくタイの専門家が同じピアな立場で当事者エンパワメントに関わっている本ケースは大変励まされるもので、今後は彼らの中でプログラムを組み、ラオスの環境に適応したプログラムを当事者間で考える人的ネットワークとプログラム策定の経験を今回習得できたことは彼らにとって幸いであった。

ラオスにおける視覚障害者教育の問題点と点字教材の振興

IT教育も含め視覚障害者のための教育全般の問題に関していえば、ラオスにおいて障害者、とりわけ情報弱者として取り残されている視覚障害者への教育の早急な改善は急務である。ラオスに存在する盲学校は全国で僅か2校、そこには各数十名の生徒が学び、施設では点字の読み書きだけが教えられる。平均2年盲学校で学んだ後、ラオスでは通常視覚障害児は基本的に普通校に統合される。しかし、公立の普通校では点字教材が一切用意されておらず、視覚障害児を取り巻く学校教育の環境不備の問題が際立つ。またラオスにおける障害当事者の活動は肢体障害者(ポリオなど)が中心であり、若い視覚障害者リーダーが不在ということも今後のラオスにおける視覚障害者の生活改善と社会統合に向けてのリーダーシップに大きく影響し、危機感として認識されている。普通校で多くの視覚障害者が教材などの不備から不登校になる現状を踏まえ、教育は人間育成の根幹を為し、BHNの観点からも、まず点字教材の充実の下、教育を受けたラオスにおける視覚障害リーダーの育成が急務となっている。教育の普及と教育機会を通して取り分け障害児の未来は左右さ

れることから鑑みても、障害児、特に視覚障害児の教育現場における点字教材の充実は何よりも真っ先に行わなくてはならない支援であり、本年度中に点字教材の全国普及の足がかりを構築する上でも支援の必要があり、教育を司るラオス教育省への視覚障害者教育改善を訴えるためにも点字教材をパイロット・プロジェクトという形でITワークショップが実施する方法で、小さいながらも着実な社会啓発を目指し2007年8月後半には視覚障害者教育振興セミナーを開催する予定である。

(了)